

80年前のプラネタリウムの観覧記念品

光学式プラネタリウム100周年

私たちにおなじみの光学式プラネタリウムが発明されたのは、今から100年前の1923年のこと。ドイツのカール・ツァイス社が、ドイツ博物館から依頼を受けて製作し、公開されました。それから改良が加えられ、1925年にドイツ博物館で常設公開されています。それにちなみ、世界各地でプラネタリウム100周年をお祝いしています。日本でも、全国の関係者による組織「日本プラネタリウム協議会」(JPA)で100周年の記念事業を展開しています。大阪市立科学館でも、関連事業を計画していますので、詳しいことが決まった際にはご案内します。

さて、大阪市立科学館の前身の市立電気科学館は、いまから86年前の1937(昭和12)年3月13日にオープンしました。日本最初のプラネタリウム施設でしたので、オープンの際は運営に関する全てが手探りだったと思われます。そのような中、現在の私たちにおなじみの来館者向けのサービスが、開館直後からありました。ここでは、そのいくつかをご紹介します。

プログラムの紹介リーフレット

1つ目は、プラネタリウムのプログラムを紹介したリーフレットです。

プラネタリウムの星空解説で取り上げるテーマは月ごとに変えていきましたが、開館した翌年の1938年3月からは、毎月の内容を簡単に紹介したリーフレットの配布を開始しました。写真1はその第1号です。その月の星空の図や、折々の天文の話題も盛り込まれており、来館記念のお土産にもなりました。少し前まで多くの施設で採用されていたこの形式の配布物は、歴史的には85年前までさかのぼることができます。

プラネタリウムの記念スタンプ

2つ目は、来館記念のスタンプで、かつて科学館やプラネタリウム施設でよく見かけました。電気科学館でも、開館当初から記念スタンプがあったようですが、詳細な



写真1:1938年3月発行の電気科学館パンフレット。

記録は見当たらず、デザインがわかっているのは開館翌年の1939年頃のもので(写真2)。カール・ツァイスⅡ型投影機のシルエットに加え、「星の劇場 プラネタリウム」、「天象館」という文字がデザインされているのが特徴です。レトロモダンな図柄ですね。

電気科学館において、プラネタリウムに「星の劇場」というニックネームを使っていたのは1939年頃から1943年頃が中心で、リーフレットなどにもよく見られます。

その影響を受けたと思われるのが、大阪出身の作家織田作之助(1913~1947)で、「星の劇場」という作品を著しています。戦地にいる友人から届いた手紙を読んで電気科学館に足を運び、初めてプラネタリウムを見た時のことを書きとめた、わずか400字余りの小品です。プラネタリウムを見た事がある方なら共感を覚えるような文章で、インターネットの青空文庫で全文が公開されていますので、ご一読を。



写真2:プラネタリウムのスタンプ。パンフレットに押されていたもの。

プラネタリウムの入場チケット



写真3:観覧券

3つ目は、プラネタリウムを観覧する時にもらうチケットで、来館記念のお土産になります。科学館には、1937年当時の観覧券も伝えられています。写真3のようなものですが、広大な宇宙をイメージしたような図柄ではありませんが、とてもお洒落なデザインで、家を持って帰りたくなる気持ちにさせてくれます。

開館当時、電気科学館にはデザイナーのスタッフがいて、ポスターなどの制作をしていたそうです。このチケットもデザインスタッフの手によるものかもしれません。

ちなみに当時の入場料は、大人が40銭、こども(13歳未満)が20銭。団体割引も既にありました。

このように、今でもよく目にするプラネタリウムの来館者サービスの中には、今から80年以上も前から続いているものがありました。歴史の長さを感じます。

嘉数 次人(科学館学芸員)